

中区正木一丁目 所在

正木町遺跡発掘調査
概要報告書

1986

名古屋市教育委員会

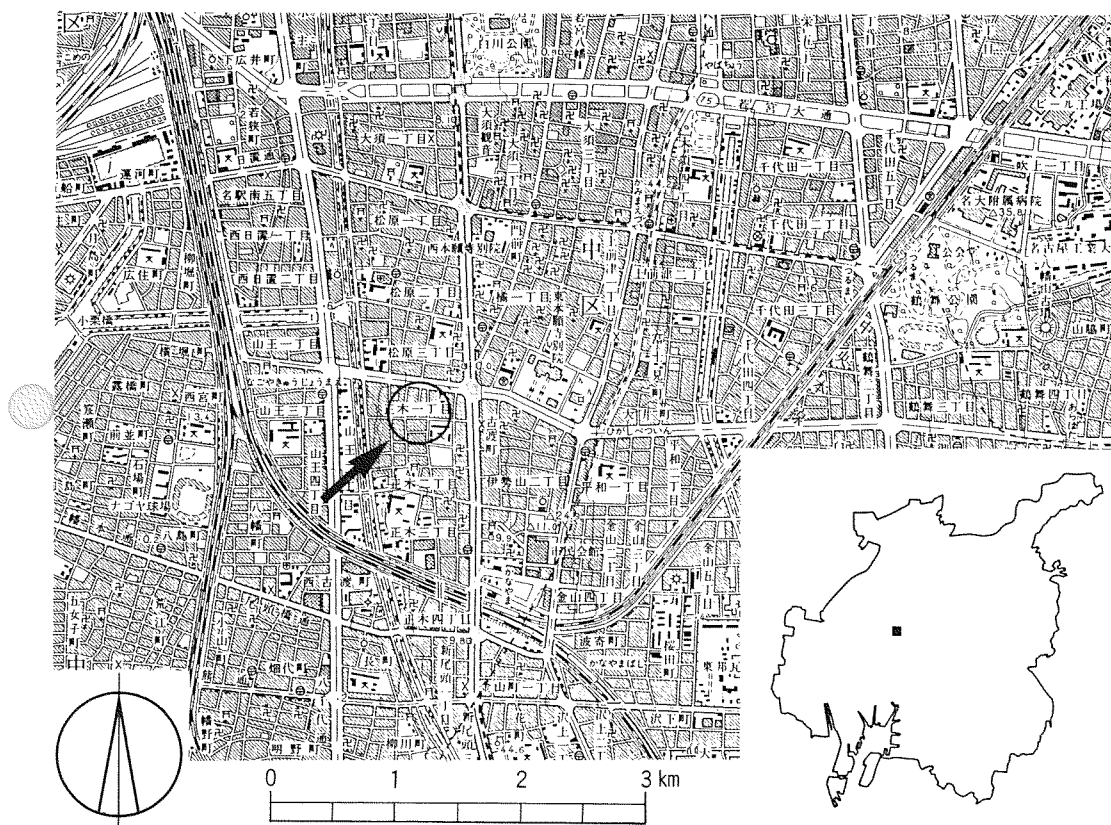
例 言

1. 本書は、名古屋市中区正木一丁目、山王通地内で行なわれた、正木町遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、名古屋高速道路分岐3号線建設に伴うものであり、名古屋高速道路公社からの委託を受けて、名古屋市教育委員会が行った。
3. 本調査は、昭和60年10月15日から昭和61年1月30日まで行った。
4. 調査にあたっては、名古屋高速道路公社の関係各位に、終始、温かい御理解を頂いた。また、飛島・徳倉共同企業体、大島造園土木株式会社、玉野総合コンサルタント株式会社の協力を得た。
5. 本調査に関する調整事務は、名古屋市教育委員会文化課文化財係が担当した。
6. 本調査は、名古屋市見晴台考古資料館、山田鉦一・野澤則幸・木村有作・伊藤厚史・竹内宇哲が担当した。
7. 本書は、調査担当者の協力を得て、竹内が作成した。また、以下の方々の御教示を得た。(50音順・敬称略)
池本正明・伊藤禎樹・内田智久・栗田真澄・丹羽博・渡辺誠
8. 本遺跡出土の自然遺物は、鑑定及び分析を、名古屋大学助教授渡辺誠氏に依頼し、現在整理中である。
9. 本遺跡出土の遺物・実測図等は、名古屋市見晴台考古資料館(名古屋市中南区見晴町47)で保管している。

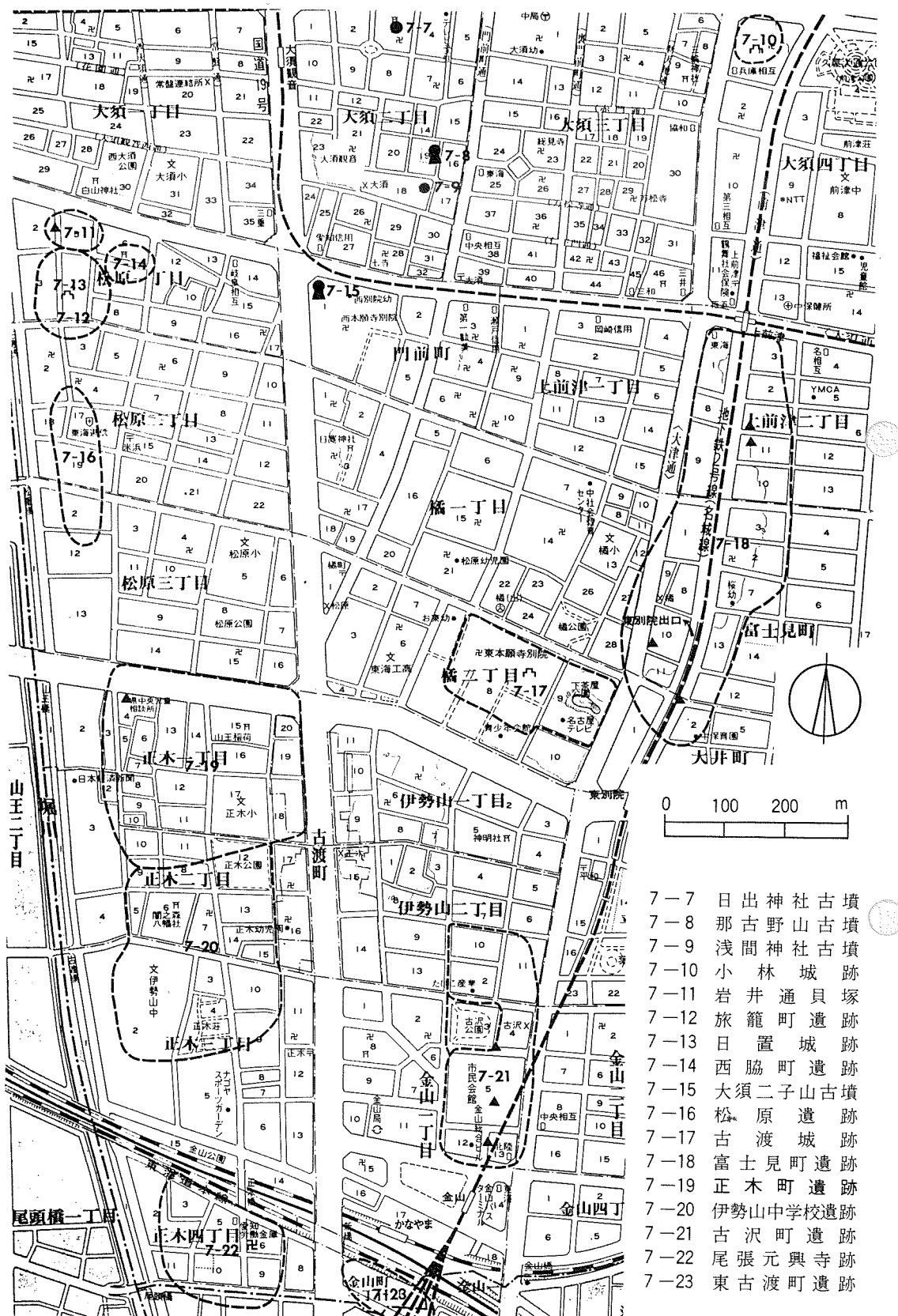
I. 調査に至る経過

正木町遺跡は、名古屋台地の西端に位置する遺跡群のひとつで、現在の名古屋市中区正木一丁目・正木二丁目・古渡町に広がっている。もと正木町貝塚と呼称され、昭和26年には北村斌夫氏が、同27年・39年には南山大学が、また、同44年には伊藤禎樹氏が、それぞれ調査を行っている。その結果、弥生時代後期の土器や石鏃、土師器、須恵器、山茶碗などの他、滑石製の剣形模造品・白玉が出土し、一方、ハマグリやアカニシを含む、弥生時代後期の貝層や、古墳時代の住居跡などが検出された。

このように、正木町遺跡は、以前から知られる遺跡ではあるが、その範囲は明確に把握されず、昭和57年3月に名古屋市教育委員会（以下、市教委）の発行した遺跡分布地図では、山王通の南側をその北限としている。従って、今回の調査箇所は、その時点では遺跡の範囲外にあたる。その後、市教委では、昭和59年度の道路工事計画に於て名古屋高速道路分岐3号線が建設されることを知り、名古屋高速道路公社（以下



第1図 正木町遺跡の位置

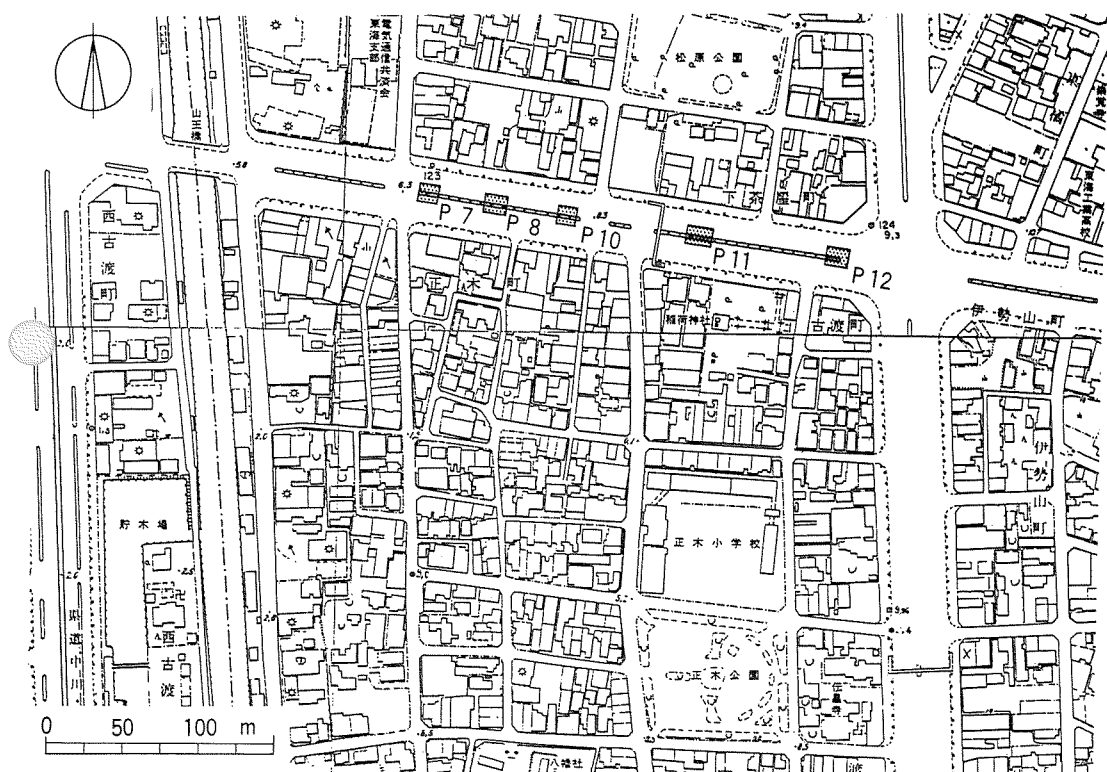


- 7-7 日出神社古墳
- 7-8 那古野山古墳
- 7-9 浅間神社古墳
- 7-10 小林城跡
- 7-11 岩井通貝塚
- 7-12 旅籠町遺跡
- 7-13 日置城跡
- 7-14 西脇町遺跡
- 7-15 大須二子山古墳
- 7-16 松原遺跡
- 7-17 古渡城跡
- 7-18 富士見町遺跡
- 7-19 正木町遺跡
- 7-20 伊勢山中学校遺跡
- 7-21 古沢町遺跡
- 7-22 尾張元興寺跡
- 7-23 東古渡町遺跡

第2図 正木町遺跡と周辺の遺跡

道路公社) に対し、遺跡の発見される可能性が高いことを説明し、事前に試掘調査を実施するように勧告した。これに対し道路公社では、埋蔵文化財の保護に十分な理解を示され、原則としてこれを了承された。但し、事前調整の関係もあり、試掘調査が可能となるまでは、当該地の支障物移設工事に立会い、遺跡の存否の確認に努めた。

昭和60年1月、水道工事に伴う立会い調査で遺物包含層の存在を確認。同月22・24日及び2月15日に、試掘調査を実施。その結果、古墳時代から江戸時代に至る遺物包含層及び遺構の存在が確認され、その旨を道路公社に通知した。4月に再度、試掘調査を行い、5月17日に、道路公社・施行業者・市教委の3者で、市教委が調査を行うとを前提に、調査時期・期間などについて協議を行った。6月3日には、文化財保護法第57条の2に基づく発掘届を提出し、同19日には、愛知県教育委員会から、調査を実施するようとの指示を受けた。こうした経過を経、なお協議を重ねた結果、9月27日に、道路公社と名古屋市との間で発掘調査の委託契約を締結し、10月15日から調査を開始した。



第3図 発掘区の位置

Ⅱ．調査の概要

1．P7地点

P7地点は、南北13.0m・東西14.0mの発掘区であり、昭和60年12月13日から調査を開始した。包含層を順次掘り下げ、12月20日から遺構の発掘に取りかかり、翌年1月23日に遺構の写真測量を実施した。この地点は、以前に貝塚が検出された場所に近く、成果が期待されていた。しかし、戦後の埋土が予想外に厚く、1m前後の深さでようやく旧道路面にあたった。この下から、土坑や素掘りの溝、石垣護岸の溝などが検出された。素掘りの溝は数条検出され、出土遺物が乏しいものの、いずれも近世以前のものと考えられる。これらが廃絶した後に、石垣護岸の溝が構築されている。

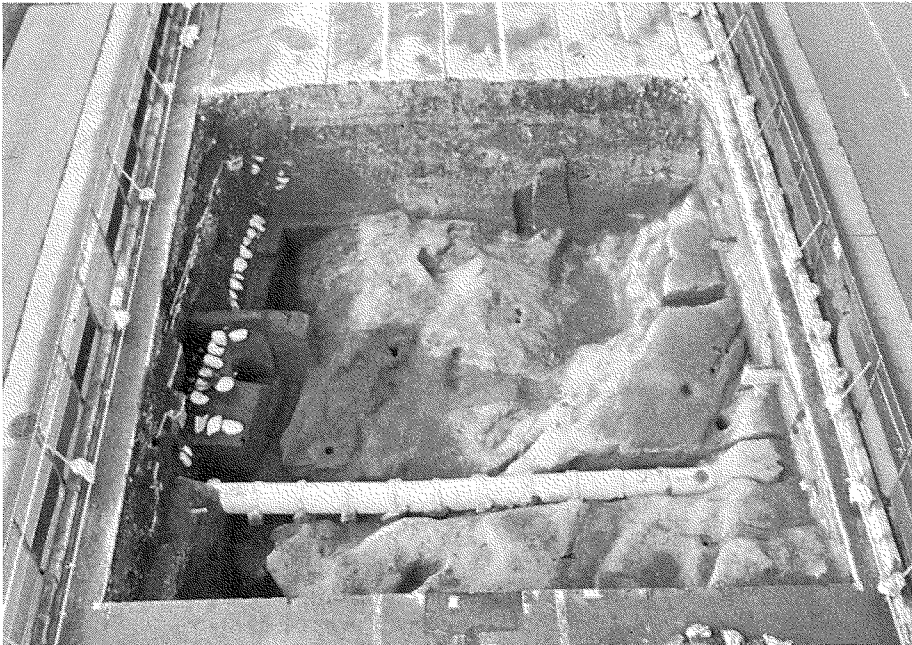


写真1 P7地点(東から)

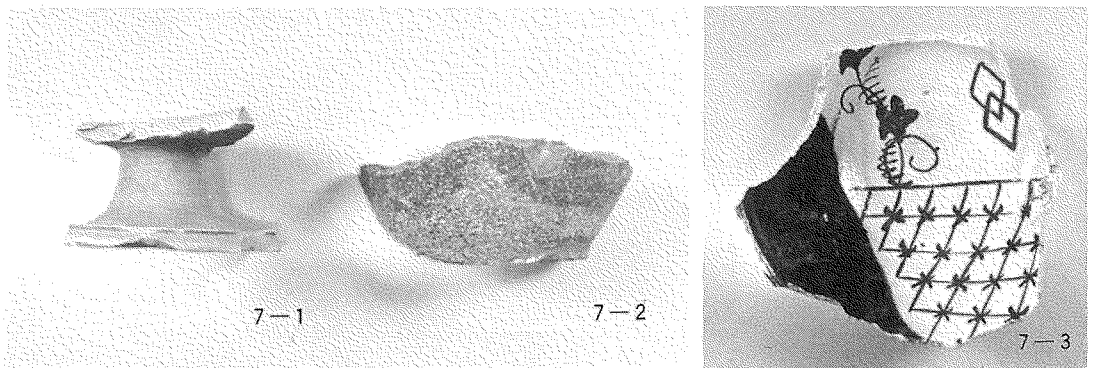
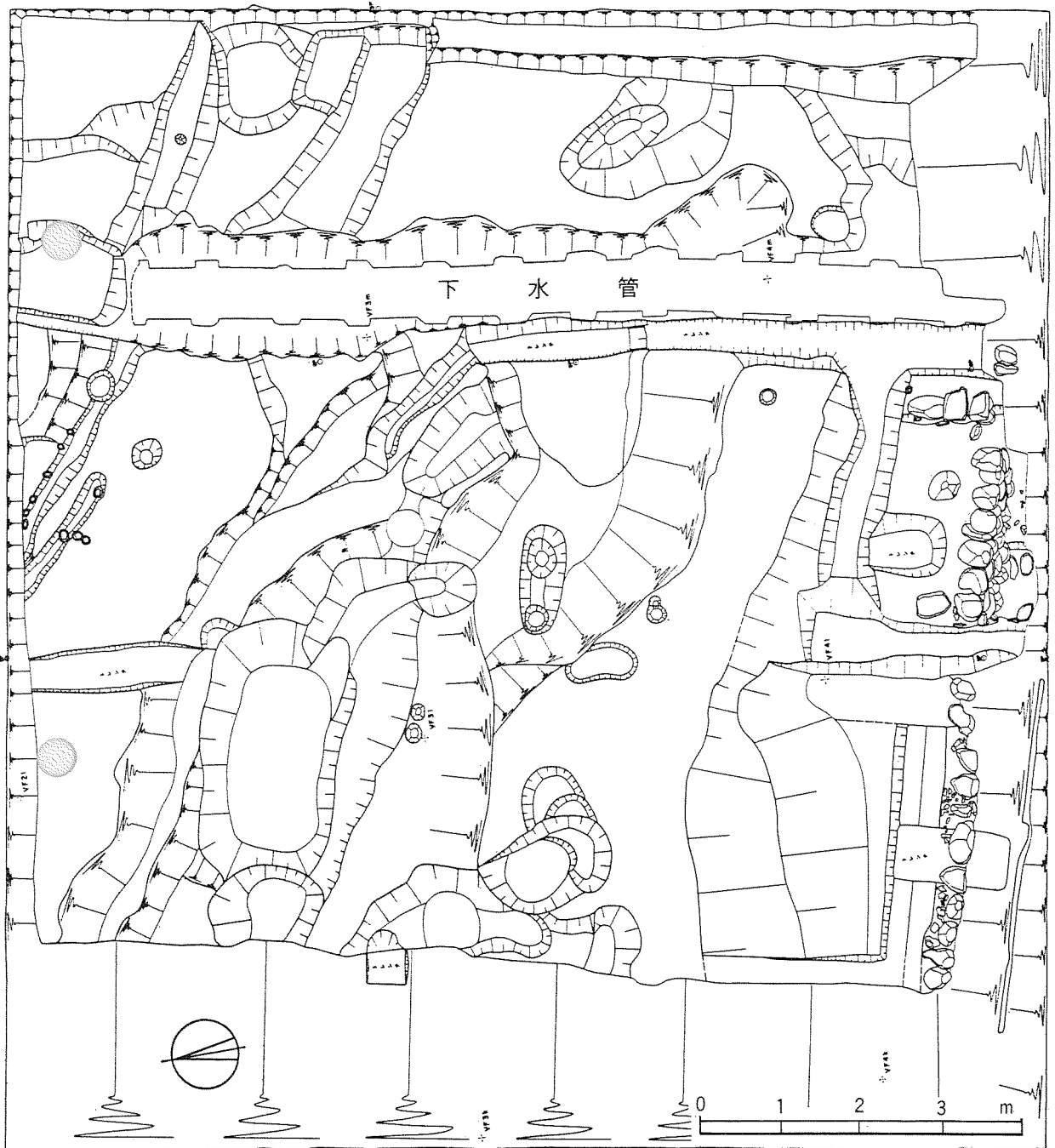


写真2 P7地点の出土遺物

の溝は、旧紫川遺跡と同様のものと推定されるが、発掘区の端であり、なおかつ、現地表面から深いこともあって、全容を知ることは困難であった。

P7地点からは、奈良・平安時代の須恵器、山茶碗、近世陶磁器などが出土した。



第4図 P7地点遺構平面図

2. P 8 地点

P 8 地点は、南北13.0m・東西16.5mの発掘区であり、昭和60年10月15日から調査を開始した。この地点は覆土が薄く、路盤のすぐ下は、地山であった。11月13日には遺構の発掘を終了し、同21日に遺構の写真測量を実施した。

路盤のすぐ下が地山であったことから、過去に削平を受けたことが想起される。地山への掘込みも多数検出されたものの、その多くは明治時代以降のものであった。が一部では、出土遺物から中世頃と考えられる柱穴やピットがいくつか検出され、掘立柱の建物が存在していた可能性もある。これらを含め、出土遺物は、コンテナケースに3箱程度であった。

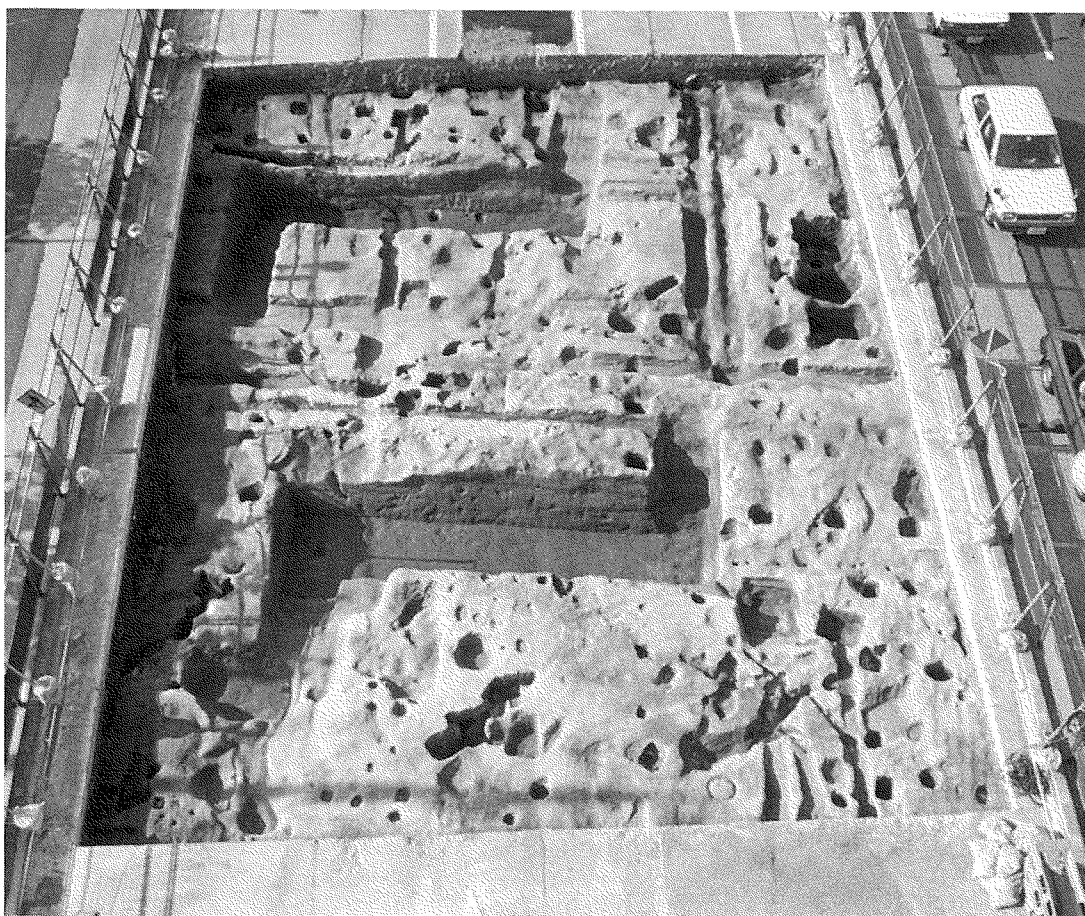
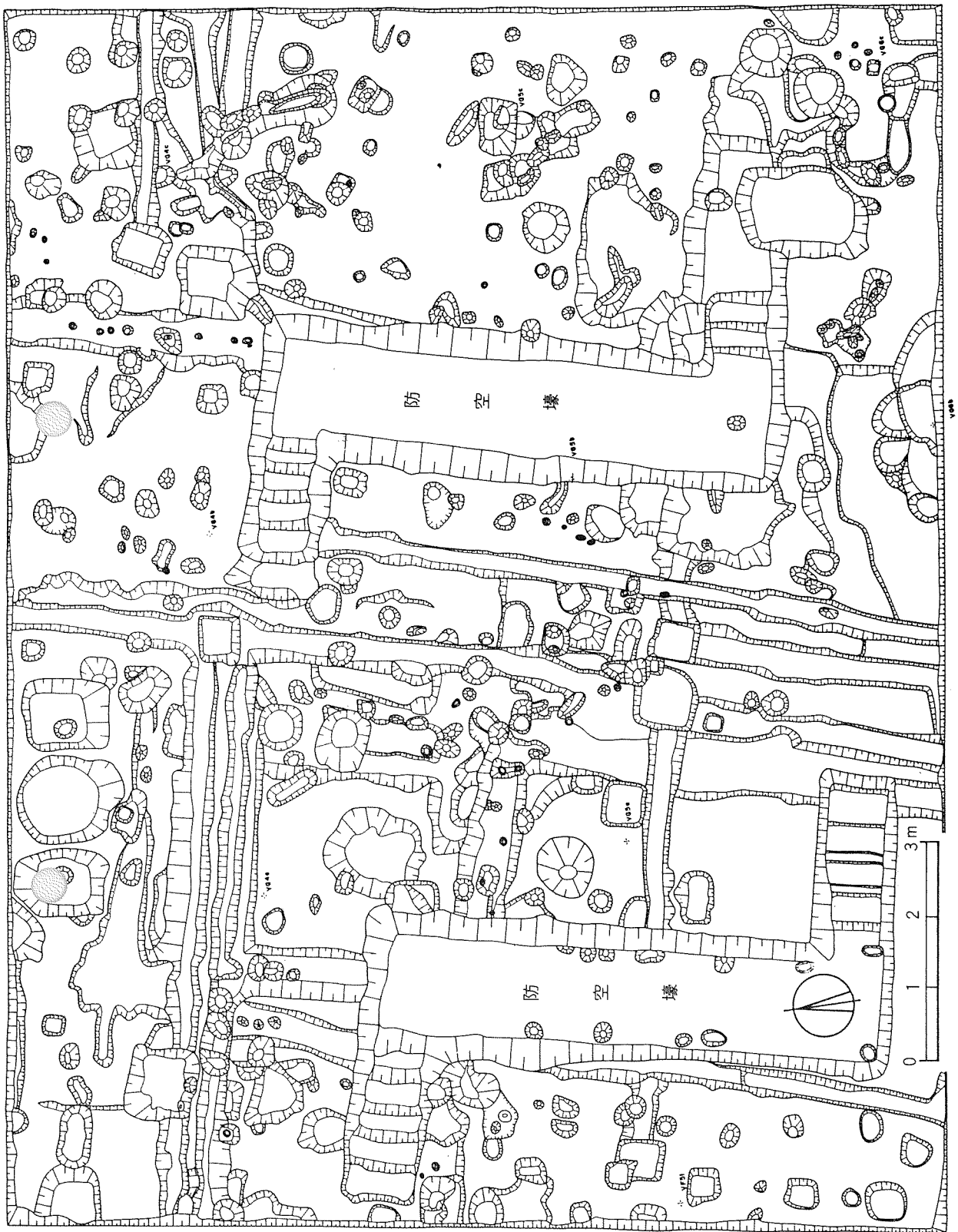


写真3 P 8 地点 (東から)



第5图 P8地点遗构平面图

3. P10地点

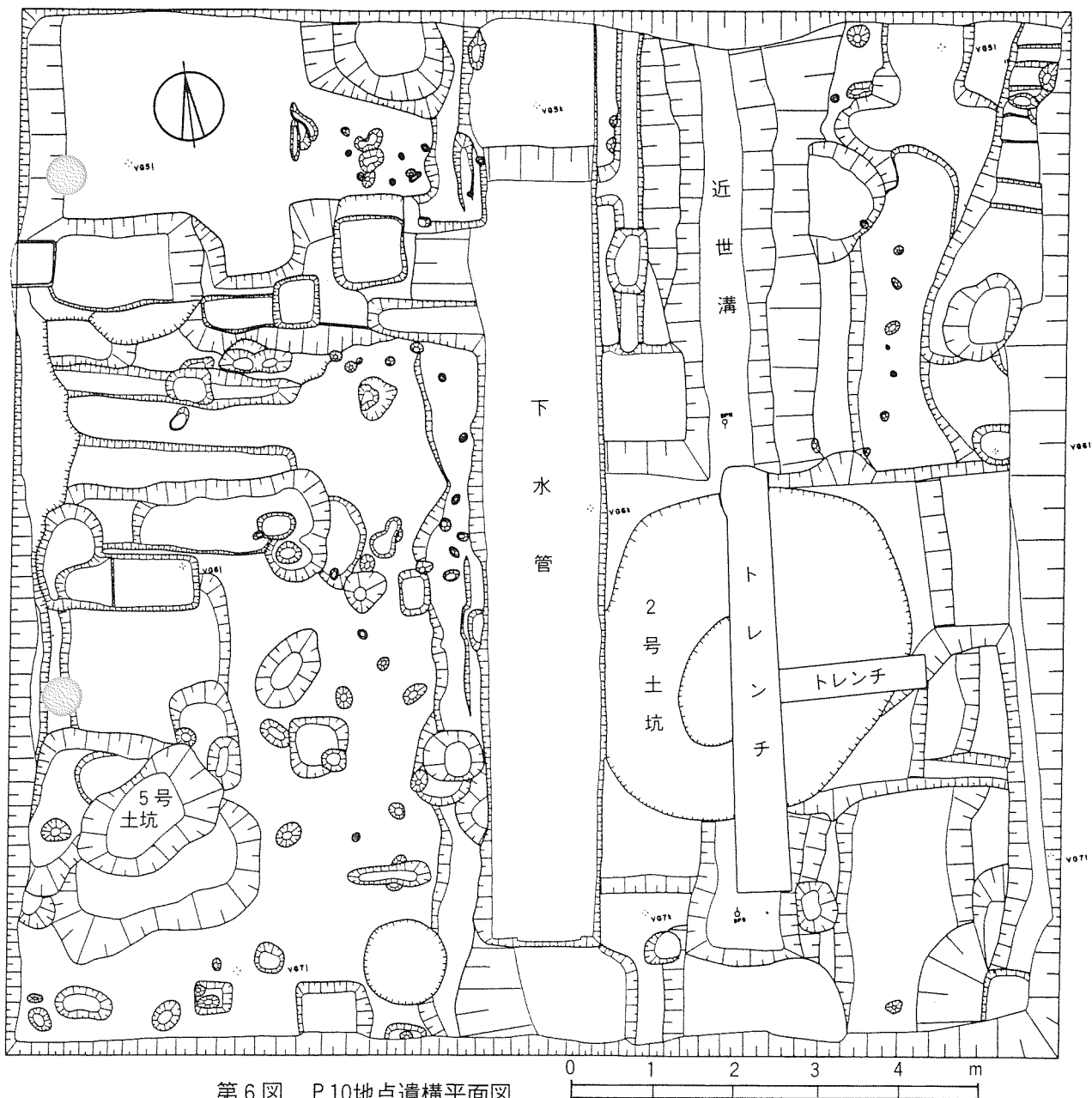
P10地点は、南北12.8m・東西12.8mの発掘区であり、昭和60年10月15日から調査を開始した。同22日には遺構の発掘に取りかかり、11月15日に発掘を終了。同21日に遺構の写真測量を実施した。

この地点では、土坑や溝などが検出された。2号土坑は、中世の井戸跡かと考えられる遺構である。現地表面から5.5m程掘下げてもなお遺物が出土したが、通行車両の振動などにより一部が崩壊したため、それ以上の掘下げは断念した。埋土は下位から、砂層・黒褐色土層・貝層・黒褐色粘質土層に大別できる。砂層は、周囲から中央へ流れ込むような堆積を示すものの、貝層は逆に、中央が盛上がるレンズ状に堆積している。この遺構を井戸跡であると推定したのは、単に、あまりにも深いからであって、井戸枠などの施設が検出されているわけではない。しかし、井戸跡と考えたほう



写真4 P10地点（西から）

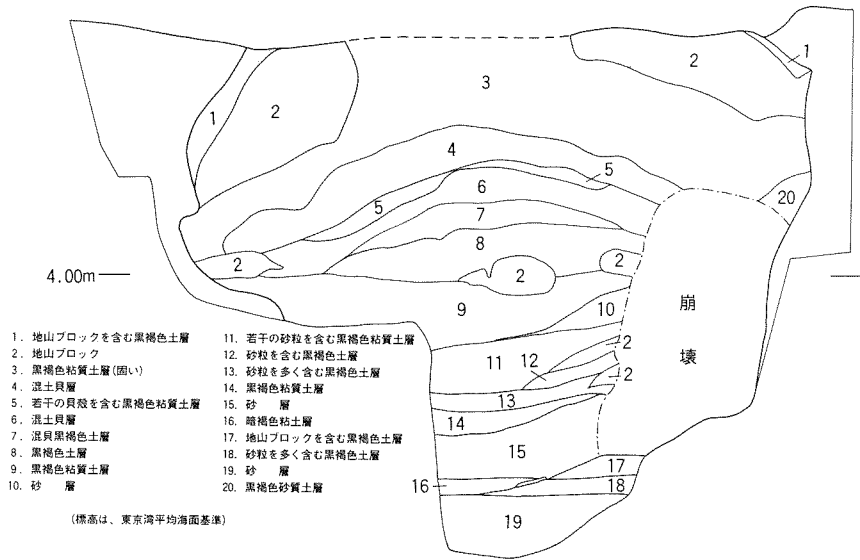
が、埋土状態についても説明がしやすい。即ち、①素掘りの井戸の周囲が崩れ、袋状を呈するとともに、崩れた砂が堆積する。②そのためか、井戸は廃絶され、黒褐色土が流れ込んで堆積する。③その後、廃棄土坑として転用され、貝殻などが捨てられて堆積した。あくまで推論であるが、遺物面からはどうであろうか。整理途中であるため確実ではないが、砂層からは、身の深い山茶碗が出土している。一方、貝層から上



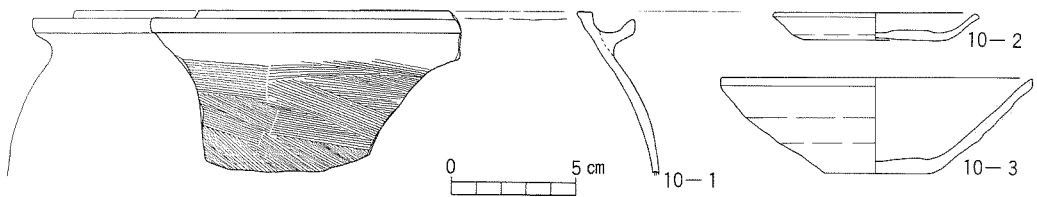
第6図 P10地点遺構平面図



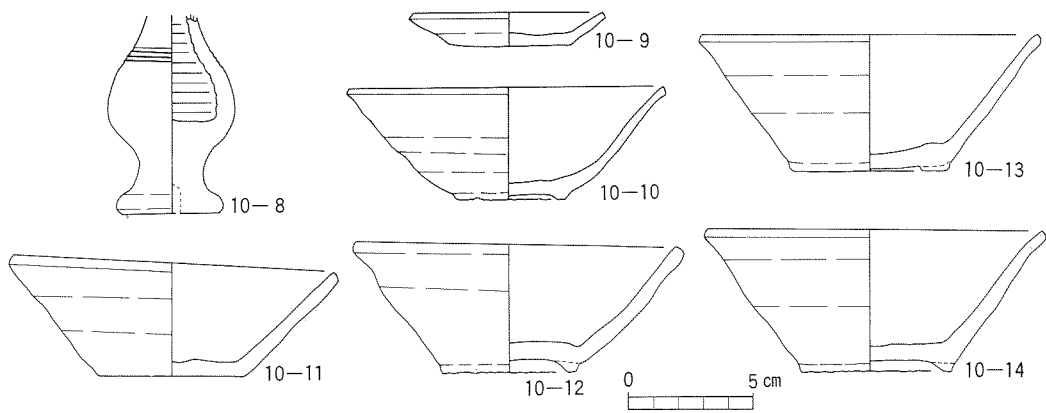
写真5 P10地点2号土坑



第7図 2号土坑セクション



第8-1図 2号土坑出土遺物



第8—2图 2号土坑出土遺物

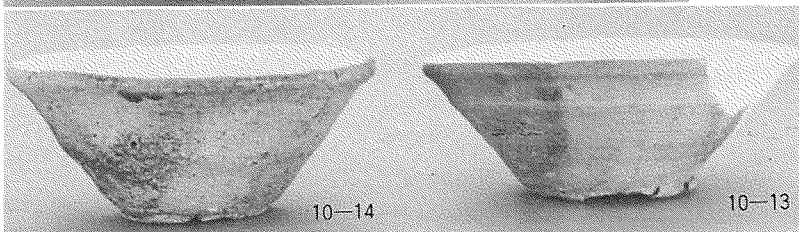
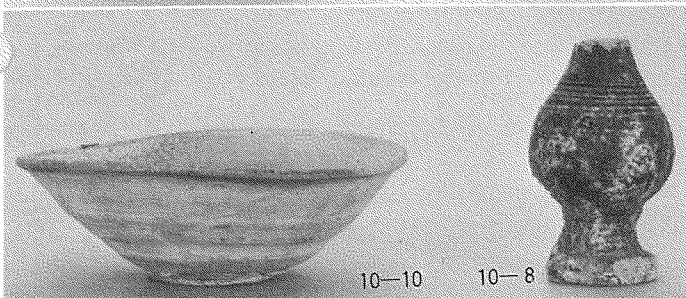
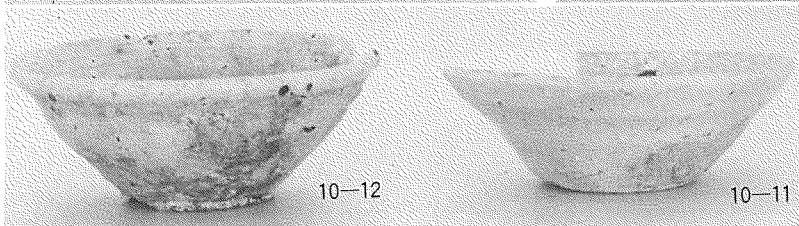
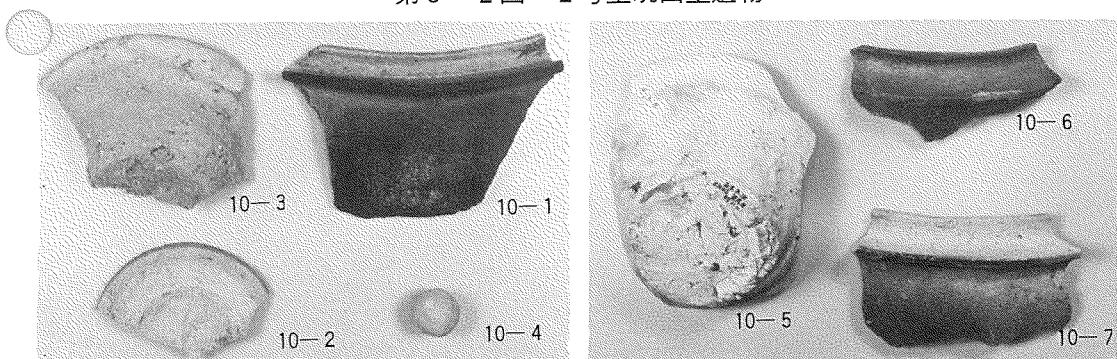


写真6
2号土坑出土遺物

位では、それよりも新しいとされる山茶碗や、常滑の甕などが出土している。なお、この貝層は、そのほとんどがヤマトシジミであり、極めて稀に、タニシやマガキが検出された。

2号土坑を開削しているのが、近世の素掘りの溝である。この溝からは幕末頃の陶磁器が多量に出土し、その量はコンテナケースに10箱程である。ざっと見た印象では皿の類が多く、他に、茶碗・湯呑み・仏花器・水差しなどがある。屋号であろうか、「稲八」・「いせ吉」と記された皿も何点か出土した。整理が進めば、この時期の溝の一括遺物として有効な資料となるであろう。また、5号土坑からは、焼塩壺が出土した。焼塩壺は主として、城内あるいは有力者の屋敷地から多く出土しており、この付近にもそうした屋敷があったのかも知れない。今回出土した焼塩壺は、渡辺誠氏の分類するB類に属し、「泉湊伊織」の刻印がある。

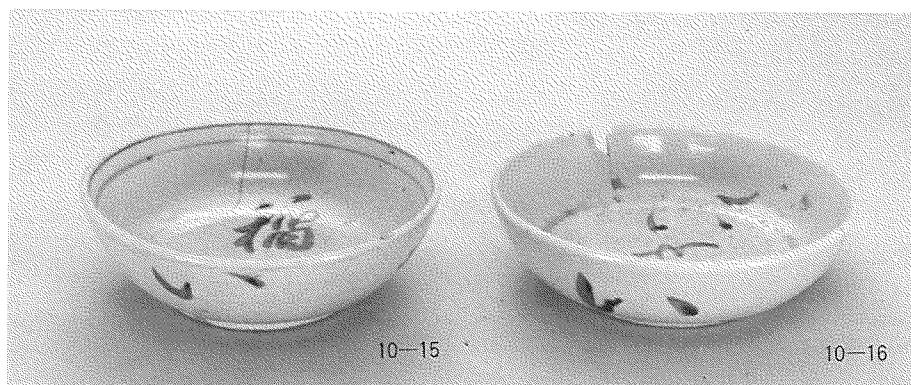


写真7-1 近世溝出土遺物

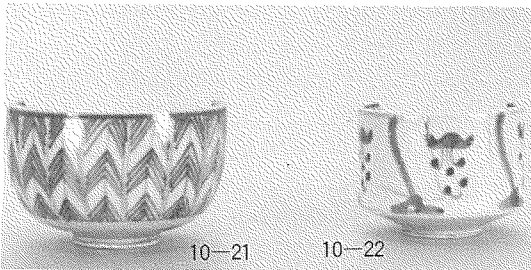
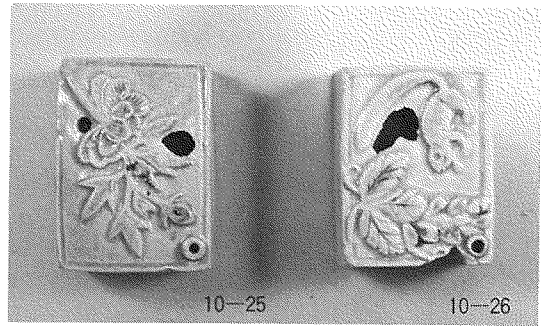
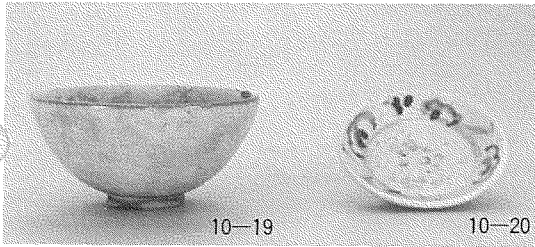
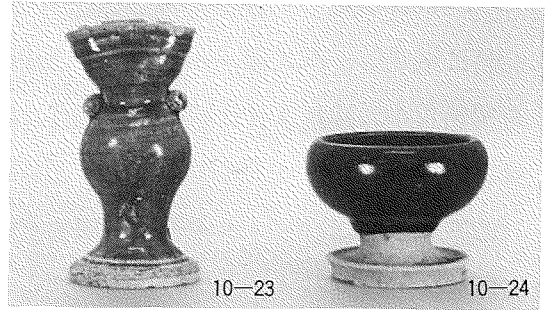
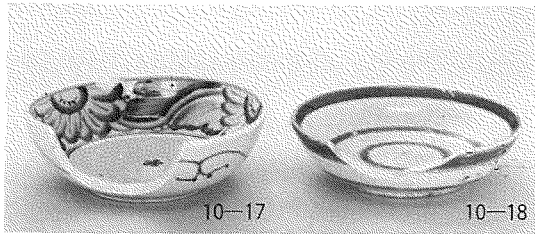
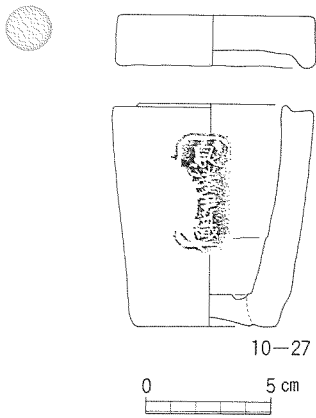


写真7-2 近世満出土遺物



第9図



写真8 焼塩壺

4. P11地点

P11地点は、南北12.8m・東西19.3mの発掘区であり、昭和60年11月26日から調査を開始した。12月3日から遺構の発掘に取りかかり、翌61年1月24日に遺構の写真測量を実施した。

この地点では、ピットや土坑、溝などの他、住居跡も検出された。1号住居跡は、発掘区の南端にある。土坑や中世の溝などで切られており、また半分程度は、発掘区外である。出土遺物も少なく、時期などを明らかに成し得ない。また、2号住居跡では、カマドが検出された。このカマドは、比較的小規模であり、中央から土師器の甕が倒置した状態で出土した。この住居跡は、中世の溝や攪乱土坑で切られているが、3m四方程度の大きさである。出土遺物は少なく、カマドの甕ですら、口縁部を全く

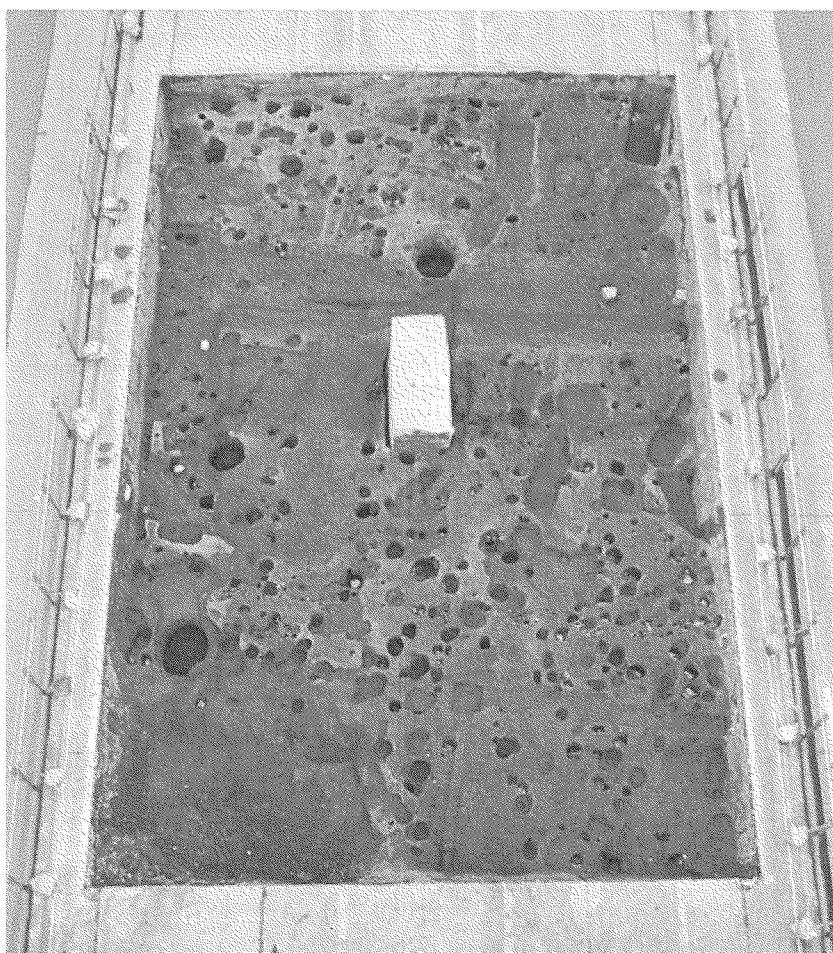


写真9 P11地点(東から)

G.N.

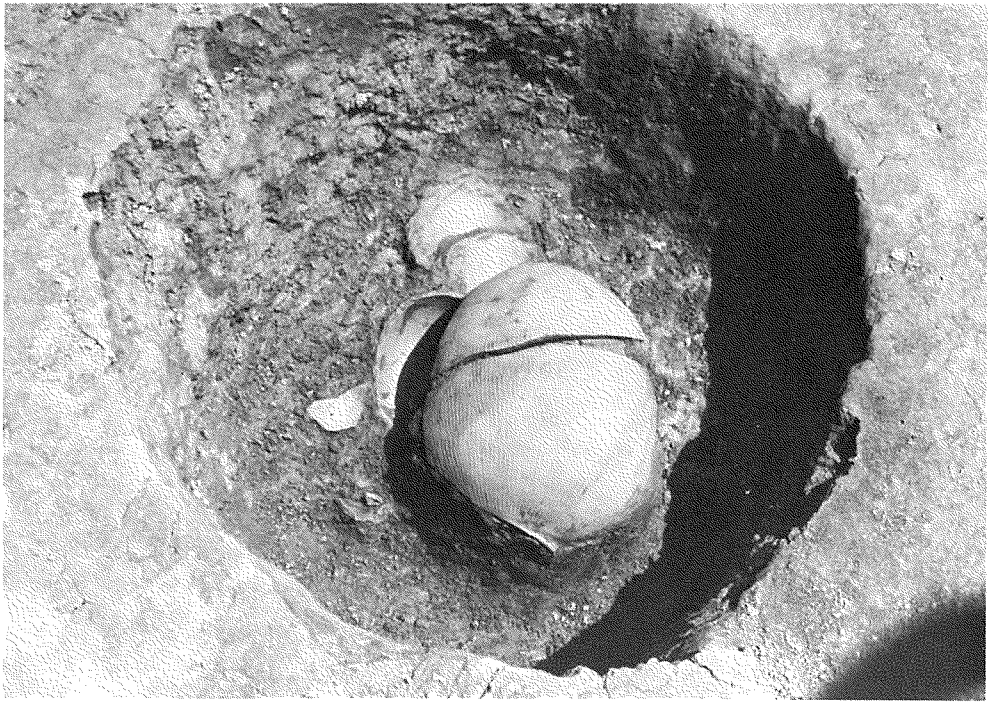


X-94,450

Y-24,400



遺構平面図 (S = 1 : 100)



2 Gr. P59 遺物出土状態（南から）



同 上（須恵器除去後）

欠損しており、時期の特定は困難である。発掘区の北東端では、U字形を呈す溝が検出された。この溝からは、須恵器の甕や横瓶などが出土した。古墳時代の所産と考えられるが、U字形を呈す意味は分からない。また、この溝の埋土からは、陶馬が出土した。体長は19cm強を測り、焼成は良くないものの、胎土から陶馬と考えられる。体部はほぼ遺存するものの、足3本などが欠損する。また、鞍の剥落した痕跡も認められ、沈線による模様と合わせて、盛装した馬であったことが分かる。

この他、P11地点からは、古墳時代の土師器・須恵器から近世陶磁器に至るまで、各時代の遺物が出土した。

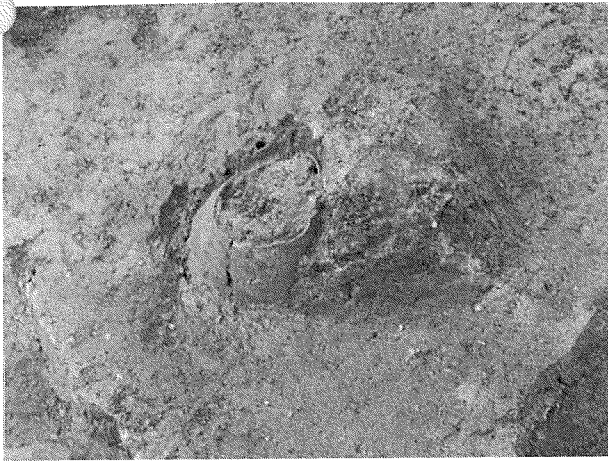
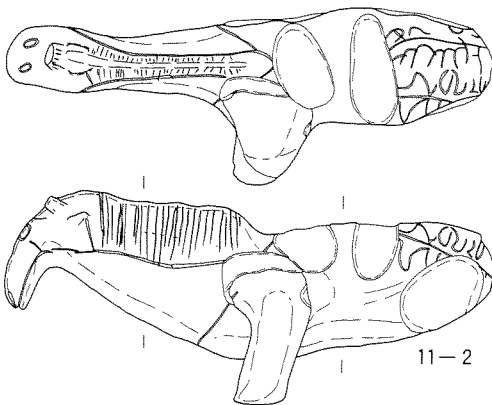


写真10 カマド検出状態

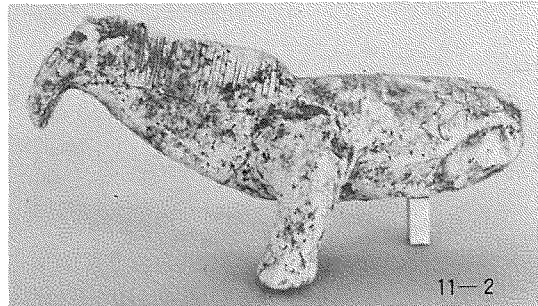


11-1

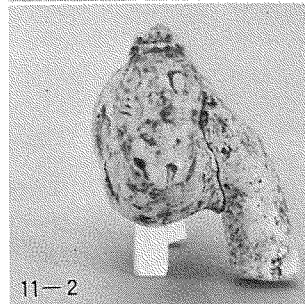
写真11 カマド出土遺物



11-2

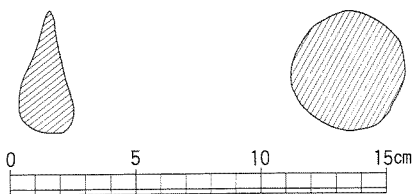


11-2



11-2

写真12 陶馬



第11図 陶馬実測図

5. P12地点

P12地点は、南北11.4m・東西16.5mの発掘区であり、昭和60年11月26日から調査を開始した。攪乱部分が多く、12月10日から遺構の発掘に取りかかり、翌年1月23日に遺構の写真測量を実施した。

この地点からは、土坑や多数のピットなどが検出された。ピットの多くは、掘立柱の柱穴と考えられ、何度も建て替えが行なわれたようである。発掘区の中央付近には自然の落ち込みがあり、そこからは貝層が検出された。この貝層は、ハマグリを主体に、サルボウ・アカニシ・マガキ・ヤマトシジミなどから成っている。また、須恵器の甕や杯・蓋・長頸瓶・平瓶や土師器、陶錘などの他、牛や馬の顎やその他の部位の骨などが出土した。自然の落ち込みを利用した廃棄場所であったのであろう。須恵器のいくつかには「×」印のヘラ記号が施されている。また、長頸瓶の底部には文字が

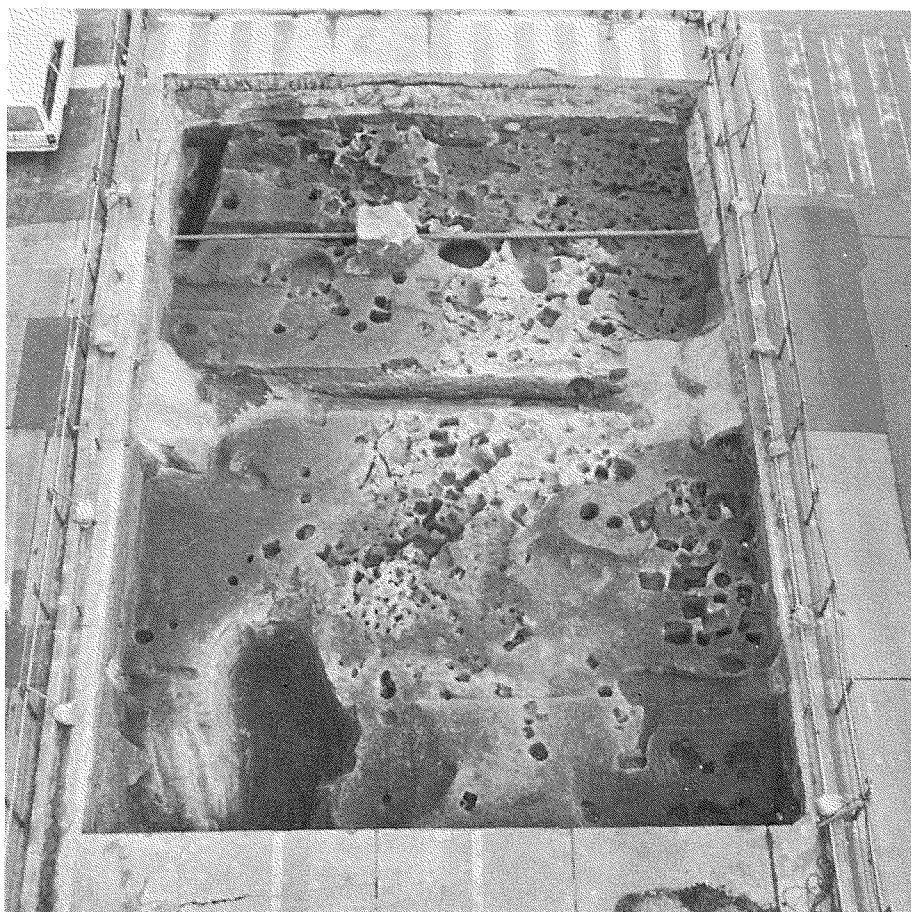
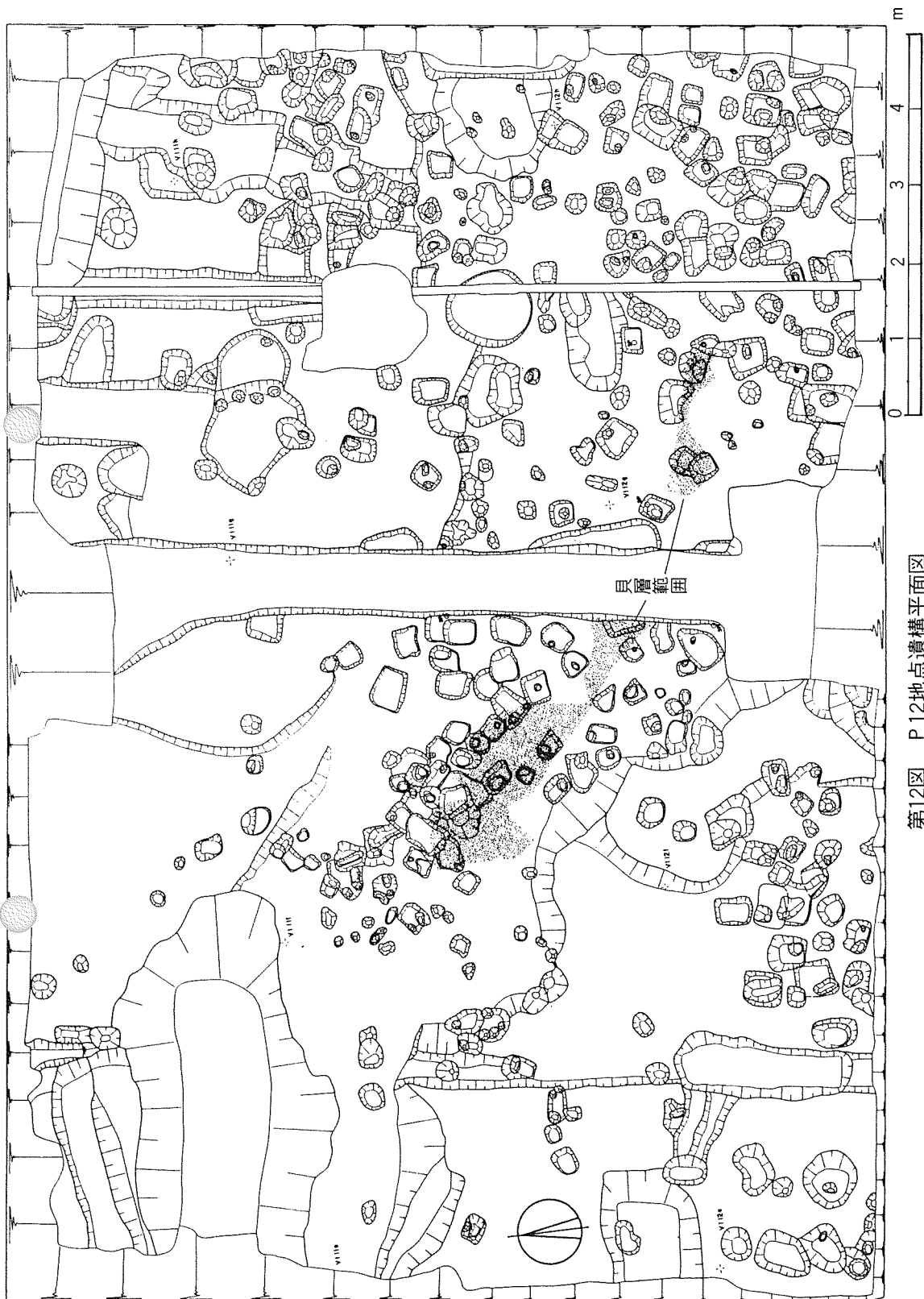
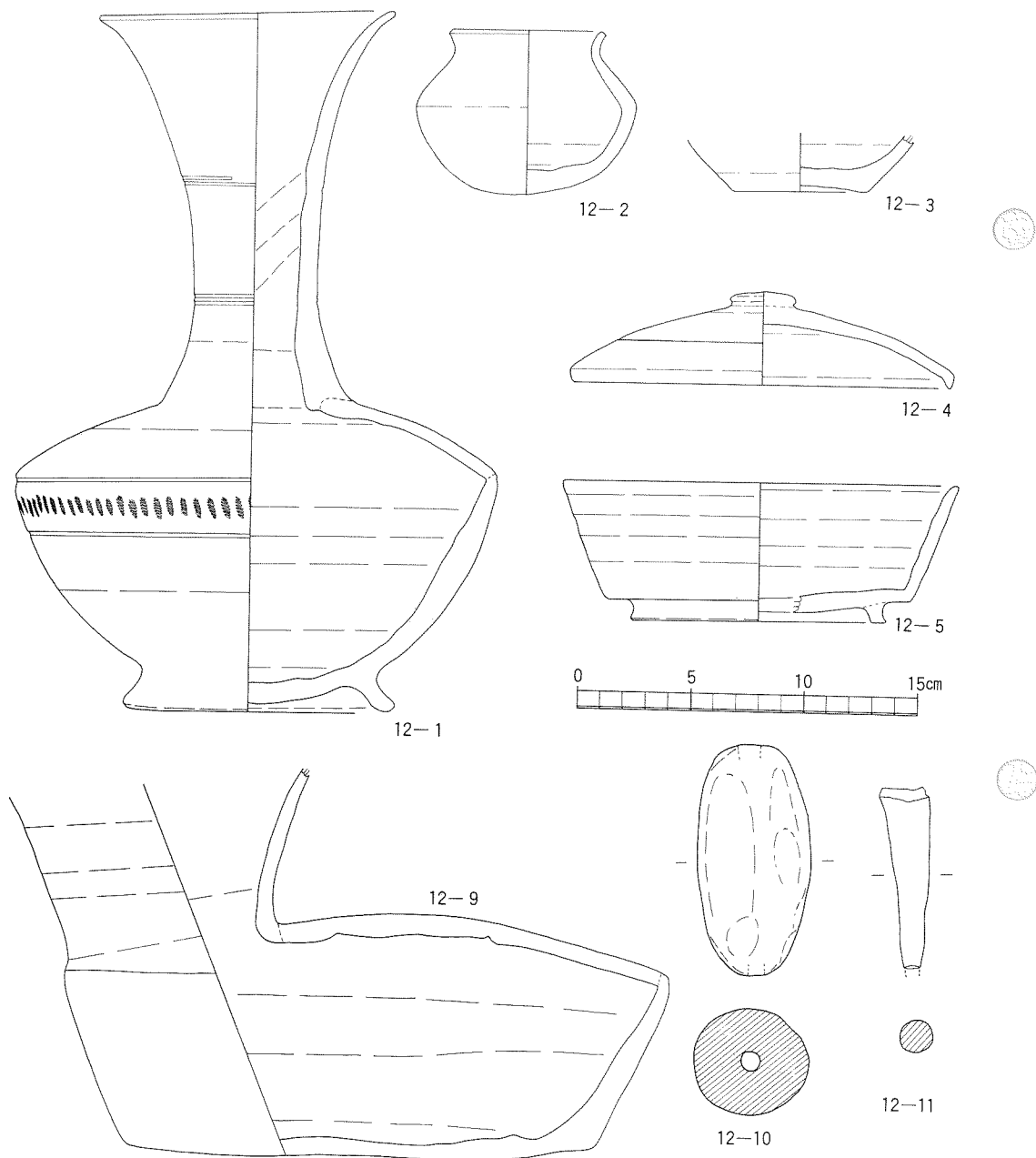


写真13 P12地点（西から）

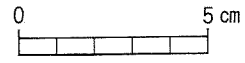
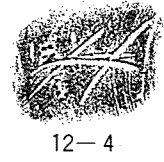
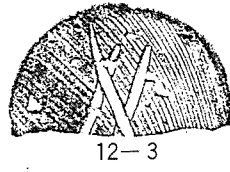
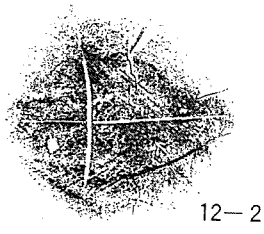
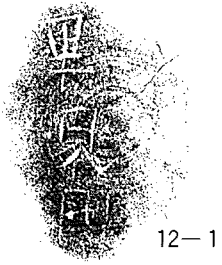


第12圖 P12地点遺構平面図

記されており、「黒見田」と読むことが出来た。これは、名古屋市天白区に所在した NN-105号窯から出土した鉢の底部に記されたものと同じである。（名古屋市見晴台考古資料館 館蔵品図録Ⅱ 1981 P.28参照）いずれにせよ、これら須恵器の年代から、この貝層は8世紀頃に形成されたものと考えられる。



第13図 P12地点出土遺物実測図



拓 影

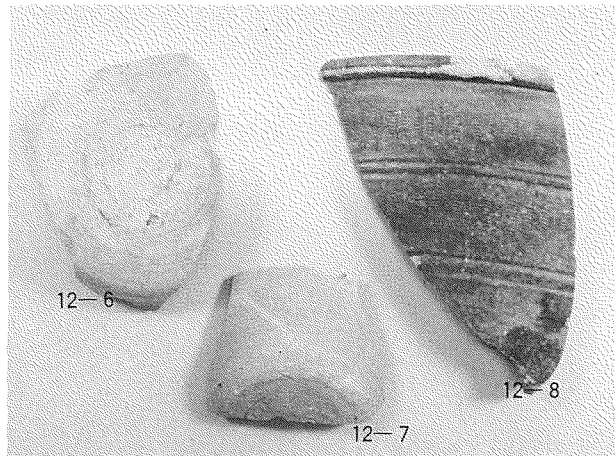
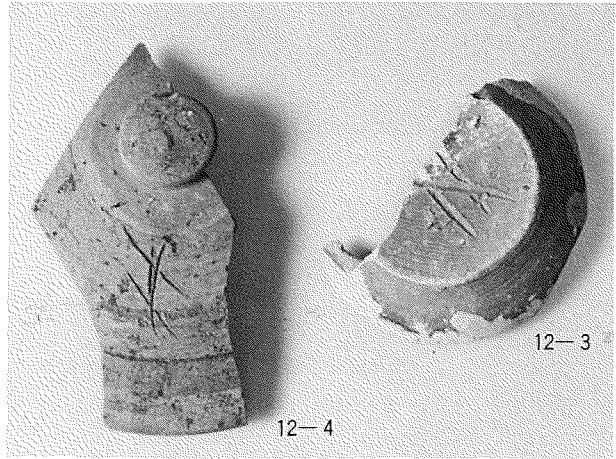


写真14-1 P12地点出土遺物

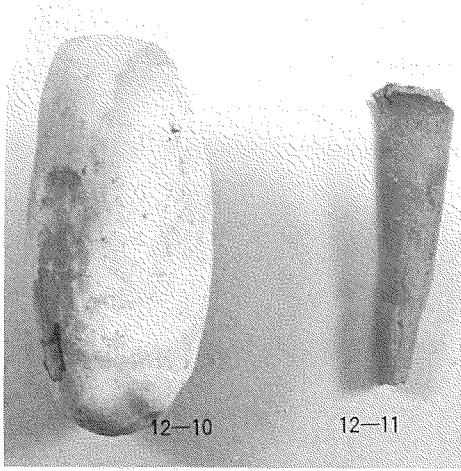


写真14-2 P12地点出土遺物

Ⅲ. まとめ

今回調査した結果については、現在整理中である。本概報は、調査中に気がついたことを中心にまとめた。従って、今後整理が進むにつれて、誤りが見つかる可能性もある。何分、途中経過であることを御理解頂きたい。

今回の調査は、全体で 900㎡弱の面積であるが、高架式道路の橋柱部分ということで、途切れ途切れであったことは否めない。尤も逆に言えば、正木町遺跡の性格を考える上では、有効な調査方法であったとも言える。そうした理由によってか、いくつかの良好な資料を得ることが出来た。P10地点の溝から出土した近世陶磁器群、P12地点の貝層から出土した奈良時代の須恵器などは、それぞれ、該期を考える上で重要となるであろう。また、P10地点の焼塩壺、P11地点の陶馬なども興味深い。P10地点の2号土坑やP12地点の自然遺物の分析も待たれる。

正木町遺跡は、本書の冒頭でも記したとおり、その実体が充分には把握されてはいなかった。もともと古墳時代以前の遺跡として知られていたが、それすら十分に公開されているとは言いがたい。こうした過去の調査結果と、今回の状況を対比してみると、次のことが言える。まず、今回の調査では、縄文・弥生時代の遺物は極めて少ない。また、古墳時代の遺物も比較的少ない。これらに対し、奈良～平安時代の遺物は各地点で出土し、正木町遺跡のひとつの画期であったことが窺える。その後の中世の遺物についても同様で、特にP10地点の2号土坑が井戸であるとすれば、集落も付近に存在したのであろう。P8地点の柱穴群もこのことを裏付けている。近世以降については言うまでもない。このように、今回の調査では、むしろ奈良時代以降のものが目についた。いずれにせよ、正木町遺跡の解明は緒についたばかりである。

掲載遺物一覧

7-1	須恵器 高杯		10-20	陶磁器 小皿	} 近世溝出土	
2	須恵器 壺		21	陶磁器 湯呑み		
3	陶磁器 皿		22	陶磁器 湯呑み		
10-1	土師器 羽釜	} 2号土坑 3層出土	23	陶磁器 花瓶		
2	山茶碗 小皿		24	陶磁器		
3	山茶碗		25	陶磁器 水滴		
4	陶丸		26	陶磁器 水滴		
5	山茶碗	} 2号土坑 4.6層出土 (混土貝層内)	27	焼塩壺	5号土坑出土	
6	土師器 羽釜		11-1	土師器 甕	2号住居跡 カマド出土	
7	土師器 羽釜		2	陶馬		
8	鉄釉 花瓶(二次焼成を) 受ける	} 2号土坑 混土貝層から 下位で出土	12-1	須恵器 長頸瓶	} 貝 内出土	
9	山茶碗 小皿		2	須恵器 壺		(底部に「黒 見田」のへ ラ文字
10	山茶碗		3	須恵器 壺		(底部にへラ記号)
11	山茶碗		4	須恵器 蓋		(外面にへラ記号)
12	山茶碗		5	須恵器 杯		
13	山茶碗	6	須恵器 壺	(底部に「×」の へラ記号)		
14	山茶碗	7	須恵器 杯			
15	陶磁器 皿(「稻八」銘)	8	須恵器 甕			
16	陶磁器 皿(「いせ吉」銘)	9	須恵器 平瓶			
17	陶磁器 皿	10	陶錘			
18	陶磁器 皿	11	製塩土器			
19	陶磁器 皿					

1986年3月20日

中区正木一丁目所在
正木町遺跡発掘調査概要報告書

編集 名古屋市見晴台考古資料館
発行 名古屋市教育委員会
印刷 澤多印刷有限会社

